

はじめに

岡村光玉先生のお名前は、私がマンダリンの歴史に興味を持ち出した2003年頃、「同志社大学マンダリンクラブ80年のあゆみ」に掲載されていた記事「Angelo Mazzola 氏との出会いとその死・ムニエルの墓」で初めて知った。岡村先生は、ご卒業後、一念発起して音楽の道を志され、また、京都から名古屋の中野二郎先生のご自宅にも足繁く通われるなど、マンダリンの楽曲や作曲家をはじめ、マンダリン音楽の歴史に関して、たいへん熱心な方であるとの印象を持ち、いずれお会いできる日が来るといいなあと思っていた。

2008年秋には、岡村先生はご自身の半生記「歌に生き、夢に生き」を出版され、偶々これをインターネットで見つけて買い求め、吸い込まれるように一気に読み終え、ますます岡村先生の熱い魅力に取りつかれ、ぜひお会いしたいと思っていたところ、ある演奏会でご指導をいただくことが決まり、2009年夏、初めてお会いすることとなった。

練習の帰路や、2010年の海外演奏旅行の行程中に、マンダリン音楽にまつわる様々な史実やお話をお伺いする中で、岡村先生が、音楽勉強のためイタリア・フィレンツェに滞在中の1978年2月、作曲家「ファルゴ」に関する研究成果を一冊の本に纏めてイタリアで出版され、その日本語原稿（1976年12月脱稿）もコピーして5部作成されたことがわかった。その内の4部は、中野二郎先生(故人)、伊東尚生先生(故人)、杉田村雄先生(故人)、およびご友人の浅沼和男氏に謹呈された。

中野先生のお手元の分は、現在、同志社大学図書館の中野譜庫に所蔵されているが、中野先生がよくご利用された形跡が残っているようである。

伊東先生の方は、マンダリン・ギター研究誌「FRET S」(廃刊)に連

はじめに

載された。そして、幸運にも、岡村先生のお手元の貴重な1部と、イタリアで出版された本も頂戴することができた。

そして、それを読んでいる内に、このファルボ研究の内容は、私蔵しているだけでは宝の持ち腐れと思い、活字にして、広くマンドリン音楽愛好家の方々にも伝えたく、また、国会図書館にも納本して未来にも伝え残したい気持ちで一杯になり、岡村先生にも快諾いただき、手書き原稿をコツコツとタイプ打ちして、この本の出版の運びとなったものである。

このファルボ研究の内容は、ファルボの生い立ちから突然の死まで、さまざまな活躍の軌跡や、マンドリン音楽に対する姿勢を解き明かすばかりでなく、当時のイタリアと日本の斯界についても多く触れられている。

岡村先生が、一つの手がかりをもとに、どのようにしてファルボの「謎」の部分解き明かしていったか、そして、新しい発見をしていったか、イタリア南部の町・アヴォラに向かう旅の様子も交えながら、その足跡をドラマチックに辿るのもなかなか興味深いところである。

また、マンドリン音楽の普及と発展に貢献したアレッサンドロ・ピッツァリ主宰の「イル・プレットロ誌」の活動状況や、その一部邦訳や、オーケストラ・シンフォニカ・タケキ主宰の「マンドリン・ギター研究」など、今や目にすることができない貴重な記事が多々引用されており、マンドリン音楽を趣味にもつ愛好家の方々や、マンドリン音楽を志す音楽家の方々に、ぜひお薦めしたいマンドリン音楽の貴重な歴史書の一つである。

なお、出版に際して、日本マンドリン連盟顧問の伊東恒生様と、同会員でイルヴェントマンドリーノ所属の渡辺昇様にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

中原 誠



<イタリアで出版されたファルボ研究誌（表紙）>

著者：岡村光玉先生